

與座 嘉康 論文内容の要旨

主 論 文

Development of an activity of daily living scale for patients with chronic obstructive pulmonary disease: the Activity of Daily Living Dyspnea scale (ADL-D scale)

慢性閉塞性肺疾患患者のための日常生活活動スケールの開発：日常生活活動息切れスケール (the Activity of Daily Living Dyspnea scale : ADL-D スケール)

與座嘉康, 有吉紅也, 本田純久, 谷口博之, 千住秀明

Respirology (in press)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 新興感染症病態制御学系専攻
(主任指導教員：有吉紅也教授)

緒 言

慢性閉塞性肺疾患 (COPD) 患者の日常生活活動 (ADL) 障害は、動作自体の遂行能力は保たれているが、息切れを訴えて動作を中断することが多い。そのため、一般的 ADL 評価表ではその障害状況を十分に反映できないことが指摘されている。

そこで今回、我々は COPD 患者に特異的な日常生活活動息切れスケール (ADL-D スケール) を開発し、その妥当性と内的整合性を検証した。

対象と方法

【対象患者】

男性 COPD 患者 83 例。

【ADL-D スケールの作成】

事前聞き取り調査と、先行文献調査により、息切れを感じる ADL 動作 26 項目に関する質問票を作成、対象 COPD 患者に自己記入式によるアンケート調査を実施した。この調査で、20%以上の対象者が「する必要なし」と回答した項目を削除、また、国際標準である MRC 息切れスコアと関連しない項目を削除した。さらに、理学療法士 (PT) 13 名から意見を聴取し、50%以上の PT が「削除してもかまわない」もしくは「どちらともいえない」と回答した項目を削除、残った項目を ADL-D スケールの動作項目とした。

【妥当性・内的整合性の検討】

ADL-D スケールの妥当性は、対象 COPD 患者の運動耐容能を Incremental shuttle walking test (ISWT) にて、健康関連生活の質を St.George's respiratory questionnaire (SGRQ) にて同時に評価、これらの結果と ADL-D スケールとの相関を調べることにより検討した。また、ADL-D スケールが MRC 息切れスコアの重症度を判別できるかを、MRC スコア各群間における ADL-D スケールを比較することにより検討した。さらに、ADL-D スケールと項目削除前の質問票との相関を検討した。内的整合性は Cronbach's α 係数にて検討した。すべての相関関係は、Spearman の順位相関係数にて、群間比較については、Mann-Whitney の U 検定にて検討した。全ての統計学的有意水準は危険率 5%未満とした。

結 果

必要条件を満たす 15 項目から構成された ADL-D スケールが作成された。ADL-D スケールと、ISWT ($r = 0.67$)、SGRQ ($r = -0.54 \sim -0.83$) との間に強い相関があった。ADL-D スケールは、MRC 息切れスコアの重症度間全てに有意差 ($P = 0.003 \sim 0.001$) が認められた。ADL-D スケールとそのプロトタイプである 26 項目質問票とは非常に強い相関関係 ($r = 0.97$) があった。ADL-D スケールの Cronbach's α 係数は 0.96 と高かった。

考 察

臨床現場で役立つ ADL 評価表は、多くの患者の日常生活に即した動作項目で構成され、項目が少なく簡便でなければならない。今回開発された ADL-D スケールは、患者と PT の調査から厳選された 15 項目と少ない項目から構成され、患者側にも負担が少なく、自己記入式であるため同時に多くの患者を評価できるなどの利点がある。今回の研究により、ADL-D スケールは、運動耐容能、健康関連生活の質と強い関連があり、MRC 息切れスコアを判別できることが証明された。さらに、質問項目の厳選による影響が殆どなく、内的整合性も非常に良好であることが証明された。